

令和6年度 第1回さいたま市アーバンスポーツ研究会 議事録

- (1) 開催日時 令和6年8月5日(木) 10:00～12:15
- (2) 開催場所 さいたま市大宮区役所401・402会議室
- (3) 出席者 鎌田委員、久世委員、小林委員、佐藤委員(会長)
田中委員、増永委員(副会長)、松田委員
欠席者 なし
- (4) 議題 (1) 令和5年度の実施結果、令和6年度の方針
(2) アーバンスポーツの活性化に向けた市民連携
- (5) 公開・ 公開
非公開の別
- (6) 傍聴者の数 0人
- (7) 会議資料 ・ 次第
・ 資料1 さいたま市アーバンスポーツ研究会委員名簿
・ 資料2 さいたま市アーバンスポーツ研究会設置要綱
・ 資料3 議題関係資料
・ 資料4 ルール・マナーの普及啓発チラシ
- (8) 議事内容
① 開会
スポーツ文化局スポーツ部長より挨拶
- ② 委員及び事務局紹介
委員及び事務局について紹介
- ③ 委員長等の選出
■ 互選により佐藤委員を会長として選出
■ 会長指名により増永委員を副会長として選出
- ④ 議題
(1) 令和5年度の実施結果、令和6年度の方針

■ 資料説明

事務局より、資料3に基づき説明

■ 意見交換

【佐藤会長】

まずは現場を見た委員より意見を伺いたい。

【田中委員】

スクールキャラバンで、パフォーマンスといろいろなお話をさせていただく活動をさせてもらった。BMX等を見るのが初めての児童も多く、とても楽しんでくれたと思っている。ルールやマナーの話で、ヘルメットの重要性や、公園等に行ったときは「来たときよりも綺麗にして帰ろう」と本当のかっこよさというものを伝えた。また、挨拶について、「ありがとう」をたくさん言ったり、言われたりできるようにするととてもいいという話をさせてもらった。実際にスクールキャラバンからアバスポさいたまに遊びに来てくれた子もすごく多かった。

アバスポさいたまについては、体験できるところが良い点だが、課題もたくさんあったと思っている。1つは告知の部分で、イベントを知らない人が多くもったいないと感じた。SNS等、多くの人を知ることができる方法を探す必要がある。SNSの感度が低い方もいるので、イベント当日に次の日程を告知できれば次に繋がる。

【佐藤会長】

大宮南小でスクールキャラバンをやった時に久世さんにご覧いただいたということで、よろしければ意見をお願いしたい。

【久世委員】

まずは、子どもが理解をしたかなと。すごいと思っただけで、自分が今度競技に踏み込めるかという時に、子どもがどこまで判断できるのかと感じた。もう1つは、先生方がどう感じたか。また、親が理解しないと子どもは動かないのではないか。アーバンスポーツに対する理解はまだまだの段階であるため、親を理解させることが必要と特に感じた。田中さんにやっていただいたのは、子どもに対するショーであって、それが理解できたかと感じたのが大宮南小学校での感想。今後、どう理解させ、どのようなマナーにしていくのが一番いいのか、子どもを参加させるためには、親の理解が必要ということを感じた。

【佐藤会長】

プログラムの中にはルール・マナーについて話はあったが、それが伝わっているかどうかという点については、難しいだろうということによいか。

【久世委員】

そのとおり。

【佐藤会長】

松田委員は、アバスポふらっと野田小プールに関わっていただいたが、意見はあるか。

【松田委員】

資料で利用状況を把握したが、少ない利用者でびっくりした。要因としては、駐車場の利用ができないことや、セクションがない、道具がないといっ

たことではないか。また、すでに取り組んでいる子が遊びに行けるという環境。久世委員から話があったように、親の理解があって、車で送迎してもらわないといけない場所にある。ハード面が解消できれば少しは利用者も増えると思う。また、名称について、現状はプールという印象が強いので、理解を得づらくなっているのではないか。スケートパークといった感じがあった方が皆さんの理解を得られると感じた。また、初心者用の場所なので、道具一式があると良いと思う。

【佐藤会長】

ターゲットとしては子だけでなく親もあるが、親の参加について振り返ってみてはいかがか。

【久世委員】

その前に、大宮南小でのPRはどのように行ったのか。生徒に対してのみ、BMXをこの時間にやるよと、それだけだったか。

【事務局】

学校の外まで募集をかけているとか、学校の中の希望者を募るという形ではなく、学校と相談し学年等を決めて授業の時間内で実施している。

【久世委員】

家に帰って子どもが親に報告したかというところもある。

【田中委員】

数組の子どもたちが、アバスポに来てくれたり、僕の施設に来てくれたりした。子どもが学校ですごいものを見たと興奮して帰ってきたということで、親子で参加して楽しんでいたケースがあった。1度興味を持ってもらえたら、逃さずに、ずっと楽しんでもらえる環境が必要と感じた。

【鎌田委員】

子どもが自ら選択してやりたいと思ったことに、親が協力するケースが多い。子どもたちがやりたいことを親として応援してあげたいという気持ちになっている。アバスポ参加者へのアンケート結果を見ると、スクールキャラバンでアバスポを知った子たちの参加が、スクールキャラバンを実施した月には多い。また、どのようにイベントを知ったかについて「知人から聞いた」というものもあるが、この数字はすごく大事で、楽しいから行こうということが伝染して、こういう結果になっているのではないと思う。

アバスポふらっと野田小プールについて、アバスポは子どもたちの0から1を作っていると考えている。やってみたかったけど、どうしたらいいかわからない方たちがアバスポに参加する。そのあとの、1から2、2から3をアバスポふらっと野田小プールを活用し作ってあげることが、その後に繋がっていくのではないか。例えば親子プラン等の時間を設けて、スクールのような形で教えてあげる。そういった活動が広がっていかないと、認知度も広がっていかない。アバスポで1を知った子が、急にパークに行き練習できるかという、まだその段階ではない。この野田小のプール等で、自分が本当にやりたいかを見いだした子たちがパークに進む。その結果、本格的にやりたいかどうかだと思う。アーバンスポーツを活用しながら、どう親子がスポーツを楽しむ環境を作っていくか。アバスポふらっと野田小プールで、1から2、2から3を作ってあげることで、親子の参加率が上がるのではないか。

【佐藤会長】

アバスポふらっと野田小プールと田中委員の施設は、並列ではなくステップで、アバスポふらっと野田小プールを活用した導線があるのではないかと意見だった。導線という言葉を使ったが、親をラインにどのように乗せていくか、ご意見をいただきたい。

【鎌田委員】

アバスポが最大の場合ではないか。子どもたちがスクールキャラバンで知り、親と一緒にアバスポに参加すると思う。今年度のアバスポは、人が集まるイベント内で実施する機会もあるので、楽しそうだから参加してみたという子や親に対して、次のイベントを周知して、次に繋げていくことが大事。

【佐藤会長】

どのように親をアバスポへ誘引するかという点で、何をどのように広報するかが重要である。「何を」には親も体験する機会があるイベントということがある。そのときに、教育効果を体感できるコンテンツをアバスポで作れたらよいと思っている。親がアバスポに子どもを連れて行きたくなるような、わざとこういう言い方をするが、やんちゃではない部分もしっかりあることを理解いただける内容を企画していただければと思うが、いかがか。

【松田委員】

アバスポに来られる方は、子どもを遊ばせたいという目的で来ている。親に声をかけても、拒否されてしまいがち。元々子どもだけ遊ばせるつもりで来ていて、突然言われてもできないという親も多いので、親子粋みたいなものを作る等、親子参加の部分を知周知していければいいと思う。

【鎌田委員】

田中委員がよくやってくれるケースで、親御さんに、次は子どもたちをこう見てあげてください、チャレンジさせてあげてくださいといったことを話す。次に繋がっていく形を、田中委員はやってくれることが多い。それは親子のコミュニケーションなどに繋がっていくものになると思う。

【佐藤会長】

アーバンスポーツにあまり縛られずに、親もできるスポーツをプログラムに加えることはどうか。アーバンスポーツの色を薄めてしまうかもしれないが。

【田中委員】

そのようなことは一切ないが、最初から親子で参加とすると、逆に参加者を限定してしまうパターンもある。子どもを楽しませようと思ったら、「俺もやんなきゃいけないの、だったらやめておこう」となるパターン。子どもを遊ばせる目的で来て、大人がちょっと遊ぶ素振りを見せて、「よかったら、やってみてください」と声をかける。やってみたくなるような内容づくり。最初から乗り気でなくても、わくわくして、やってみたらすごく面白かった。親子で次に参加してみたくなったという導き方がすごく重要かと思う。

【佐藤会長】

軸足は子どもにおいて、あわよくば親も、というところか。

【鎌田委員】

一昨年に比べて、去年の参加者は親子で参加される方が増えていた。親もやっていいという雰囲気を作られてきていると感じる。ダブルダッチ等のコンテンツも、子どもと親が手を取り合って一緒に飛ぶ等といった形で参加される方が増えてきている。ダンスも、親子で参加して、子どもが親と一緒に参加することでさらに楽しめるということが、一昨年に比べて多かった。

【増永副会長】

私の団体でも、親子で参加するイベントをやっているが、計測して何か結果が出るものだと、親子で競い合って楽しくやっているイメージがある。内容として何か計測するものがあると親の参加も促せるのではないかな。

【佐藤会長】

子どもを軸足に、親も参加できるものを作るということで、親を関わらせるような意図を講師の方をお願いし、親の実施に繋げていくといったところかと思う。後程の議題に公民の連携があるので、今日のイベントへの参加が終わった後に、市内或いは県内等、今日のイベントで行ったことができる場所があるといったような情報提供があってもいいのかもしれない。先ほど鎌田委員がおっしゃった導線というところで、初めて取られる方は、次がどこということがわからないので、導線を示してあげることがアバスポでできればよい。

もう1つ、その場でどうやってルールとマナーを大事にしていることを浸透させていくかという点で、ご意見を伺いたい。

【小林委員】

全体のお話にかぶってしまうかもしれないが、2016年にキメラさんにスクールキャラバンを静岡市で初めてやっていただいて、現場のコーディネートの協力をさせていただいたが、2011年から西奈小学校の体育館を使って、何もない平面を「インラインスケートリンク」と名付けて、継続的に活動していた。教育委員会から、体育館でインラインスケートができるという許可をもらっていたので、静岡でモデルケースとしてスクールキャラバンを始めさせていただいた。今も継続していて実施している。服織西小学校でも、放課後学習のプログラムの一環として、毎月1回実施している。玉川小学校という生徒数が12人しかいなかった山間部の小学校では、全校生徒が参加してくれたが、生徒数が少ない学校ほどできるスポーツが少ないので、個人で、年代バラバラで参加できるという点で、アーバンスポーツにすごく関心を持ってくれた。玉川小学校は今年また呼んでいただいたが、当時小学校1・2年生だった子が、卒業前にもう1度呼んで欲しいとのことだった。先ほど田中委員がおっしゃった、イベントのときに子どもに声をかけて、それを受けて親にどう浸透させるかについては、継続性がすごく大事。継続的に親が関心を持ってやらせたい機会があり、対面でコミュニケーションを取る機会が多くあるから、親に言葉で伝えることができ理解いただける。今のお話を聞いていると、アバスポさいたま等から、継続的な活動に結びついていない感じがすることが問題のネックと感じた。アバスポふらっと野田小プールでの活動のときに、美園地区で活動されているインラインスケーターの方が来ていたと思う。その方に意見を聞いたら、放課後学習でインラインスケートをやる場所を探していると言っていた。アバスポふらっと野田小プールのイベントにも来て、美園の体育館を使って活動されている方がいる。

放課後学習をお願いしたら喜んでやってくれると思う。パークやローカルの人との連携が強くなっていけば、継続性について静岡よりもハイペースで繋げていけるのではないかと感じた。静岡市の今のやり方等は1つのモデルケースになると思うので、さいたま市と共有できれば、プランニングしやすいと思う。

【佐藤会長】

スクールキャラバンとアバスポさいたまをどう繋げていくかというところで、まずルールのことをどのように子どもや親に伝えていくかということで、意見があればお願いしたい。そのあと、繋ぎの部分を考えてみたい。

【久世委員】

「スケボー禁止」という看板がよく出ている。してはいけないところですから、そのような看板が出ている。それがマナー。アバスポさいたまでどうやってルール・マナーをPRしているかがまず大事。それができてないから、親は子どもにアーバンスポーツをさせないということもあると思う。オリンピックでいい結果が出ると、親は見直す。今事務局に必要なのは、アバスポさいたまをいかにして市民に知らせるか。ルール・マナーへの取組みをPRする場を作ることが必要。各区のふれあいフェアで、アバスポさいたまをPRすることは必要だろう。野田小のようにできる場所があるから、そこで活動するようPRしていく必要がある。10月26日の大宮区のふれあいフェアで、青少年育成さいたま市民会議のコーナーを持っているので、のぼり旗やマナーのポスターを貼ってPRしよう。

【松田委員】

見沼区のふれあいフェアで体験会ができたらいいいという話をさせていただいていた。ステージで田中委員とかが技を見せたりしてアピールしてもらえれば、親子で皆さん来ているので、広まっていくのではないかな。

【鎌田委員】

アーバンスポーツを活用しながら、市民がスポーツに触れる機会が増え、その結果スポーツ実施率が向上する形がベスト。何かのスポーツをきっかけに楽しさを知り、体を動かす機会が増えたということに繋げていく。

【佐藤会長】

今の話が我々の共通理解で、アーバンスポーツを普及させるという目的と、アーバンスポーツを手段として、スポーツの機会を増やす、マナーを浸透させる等の目的があり、この2つが都合よく入れ替わっていけば良い。社会から受け入れられるには、スポーツ振興や親子のコミュニケーションの機会等になるという手段の部分をPRしていく。初期の段階は、手段を前面に押した方が理解されやすいのではないかなと思う。ルール・マナーはアバスポのルール・マナーと、市民としてのルール・マナーの軸がある。市の案内は現状アーバンスポーツのことが強いと思うので、市民としてのルール・マナーをスクールキャラバンなどで配れば、先生たちはスクールキャラバンをやった後のマナーを大事にしたいと思うので、これは意味があると伝わるのではないかなと思うが、いかがかな。

【小林委員】

僕らが出しているエチケットブックがあり、ワーズケートジャパンさんの公式のマナーブックになっている。第1版はアーバンスポーツに取組んで

いる人・施設を利用している人向けの内容がほとんどだった。体験イベント実施時等に配りたいといった声が多くあったため、第2版では路上でやる場合等の項目を追加した。今のチラシは、取組んでいる人やアーバンスポーツができる場所におけるマナーであって、これから始める人たちに対してのメリットやリスクは載っていないので、その部分を作り直す必要がある。

【佐藤会長】

今までを否定する訳ではなく、先入観を持っている方に対して、アーバンスポーツにはこういう効果があるということを少々極端にしないと伝わらないこともあると思っている。

【久世委員】

トップレベルの方は、田中委員のようにかっこいいし、しっかりされている。だが、世の中にはそうではない人も多くいるので、そういった点をしっかり注意するために私が来ていると思っている。市としては、推進していかなければいけないと言いつつも、どこでやるのか言われたときに答えがない。そうすると、いい施設を作ろうと思う。そういったことにつなげるためにも、田中委員はルール・マナーについて一生懸命伝えてくれていると思う。その辺が上手く伝わるもっといいポスターを作るようお願いしたい。

【松田委員】

境町で配布していたチラシ（小林委員の団体で発行したもの）を持ってきたが、いろいろなところでこういったものを作っている。いいアイデアを選別してもらえれば。さいたま市のチラシを大宮公園のようなスケートができる広場等に看板として設置されれば、プレーしている人たちの意識にも繋がると思う。また学校などで配布等ができれば、子どもたちにも見てもらえるのではないかな。

【小林委員】

掲示することも大事だが、モチベーションを持っているコミュニティが根付いていないと難しいと思う。東静岡では4年間ぐらい配り続けている。スケートボード等は商店街とかと揉めている現状があるが、インラインスケートの子たちはストリートに出ていない。どういった違いがあるかと言うと、配りながら伝えるということをしている。親御さんに対して、子どもがストリートに出るとこういったリスクがあるといったことをしっかり伝えている。もう1点、さきほど久世委員がおっしゃっていた地域の事情を汲んだバージョンを作る必要があると思う。極端な例では、フランスのボルドー地区では、スケーターに寄り添った新しい都市計画が進められており、決められた時間の中であれば、このエリアでスケートしてよい、ここは不可ということがすごくローカライズされたルールの中で決まっている。大宮地区の中でも、このスペースだったら使っていいよと言う人も出てくるかもしれない。そういう方がいる一方で、やってはいけない場所等個々の事情があると思うので、使いたい人とのマッチングと、細かいルール・マナーの相互取り決め等

を進めていく必要がある。

【佐藤会長】

ルール・マナーの普及・啓発というキーワードに関しては、やはり地域性や時期、啓発の仕方を工夫するなど、アイデアを練っていただきたいということを、事務局に投げかけたいと思う。

【鎌田委員】

これまでさいたま市で取り組んできたベースは大事にする必要があると思う。それぞれの地域でのルールもそうですし、集まる子たちの中で、自分たちでルールを作ることにも正解だと思う。人に決められすぎたルールは守ろうとしない子が多い。自分たちが入った話合いの中で決まったルールは、守らなければここがなくなってしまうという理解に変わる。そういうことを大事にしていかななくてはいけないと思う。

【佐藤会長】

もう1つの課題、公民の連携について、ここまでで議論されている部分がある。まだ出てきていないテーマとして、道具や施設の問題がある。市としても民のアイデアや力を借りたい部分かと思うので、次の議題である公民の連携について議論いただければと思う。事務局より説明をお願いしたい。

(2) アーバンスポーツの活性化に向けた公民連携

■ 資料説明

事務局より、資料3に基づき説明

■ 意見交換

【佐藤会長】

先ほどの道具や施設の問題について、どのようにカバーできるのかということも含めて、公と民の連携でご意見をいただければと思う。

【小林委員】

ショップのオーナーや管理者とさいたま市は連携を図っているのか。

【事務局】

現状では、一緒に取り組みをしているというところまでは至っていない。

【佐藤会長】

我々と協力関係を作っていける方を探していくという考えになる必要がある。結果的には利益に返って来ることを理解してもらい、協力を促していく。場所と道具の問題について、いきなり初心者で道具を買うこともないので、借りることができる環境も作っていく必要があるところだが。

【鎌田委員】

ショップやパークの意識が、ここで話している意識と同じであることが大

事。市内の民間事業者との連携はすごく大事なことが、違う取り組みになってしまうことは避けられないといけない。

【小林委員】

東静岡の施設ができた当初、ストリートでやっている子どもたちをどのように扱うか議論になった。結局、静岡市としてのスタンスを明確にしないまま、うやむやにしている。どのような施設・普及の仕方を推奨するのかという点が不明瞭なまま、時間が過ぎてしまった。迷惑行為におよぶスポーツは推奨できない等、どういう形でアーバンスポーツを進めていきたいのか等のスタンスを明確にすることがすごく大事。それによって、ルール・マナーのチラシの内容も変わってくる。

【鎌田委員】

今後、クラブ活動やスクール実施に広がっていったとして、もっとやりたい子が市内のパーク等に行くようになる。そこまでの過程の中では、理解を持った形でアーバンスポーツに取り組んでくれたものの、あるショップに行った結果ストリートに出てしまっただけは何の意味もなくなってしまうので、このあたりをどう考えていくかが非常に大事。

【小林委員】

施設等に行った先でも、ストリートに出るリスクなどについて、子どもだけではなく親にも伝えていくことが大事。

【鎌田委員】

ショップ等を行っている方は、ストリートがかっこいいという方も多い。世界で活躍しているトップレベルの日本人選手が多くいる中で、中間層により社会的に認められないものになってしまうのはすごくもったいない。

【佐藤会長】

具体的にどう取り組んでいくかというと簡単ではないと思う。民間で施設を持っているということは、ある程度、街中でやることを否定していると思うので、民間施設と協力することで、市としてストリートではなく施設でやってほしいという意思表示ができるのではないかなと思うが、いかがか。民間施設とのタイアップを考えていくことで、パークで取り組むという導線を教えてあげるといった考え方。

【小林委員】

ワールドスケートジャパンさんとの企画段階の話だが、マナーブックの配布場所にステッカーを貼ってもらうことやワールドスケートジャパンさんのホームページに、マナー教育に協力的なショップのリストを作ろうという話をしている。他の自治体で、誰でもイベントに呼んでしまい、報酬を出してしまうといった例があり、それがマナー教育をあやふやにしている。さいたま市としてのスタンスを示したうえで、協力してくれるショップにはイベントにも声をかける。乗れない人たちには、そちらの裾野を増やすわけにはい

かないので、一緒にはやれないと。機会があったら見ていただきたいが、東京オリンピックで金メダルを取った四十住さんと、ストリートスケーターの森田さんが対談した記事がある。そこでは、四十住さんがストリートスケートの何が面白いのかわからないと言っている。双方面白いところがあるという着地点になっているが、競技としてスケートボードを始めた子からすると、ストリートで活動することが必ずしもありきではないと、スケートボードシーンが変わりつつあることがわかる。同じ方向性で協力いただけるショップと一緒に取組めば、少しずつカルチャーが変わっていくのではないかな。

【佐藤会長】

ショップへは、何か協力してくれたら何かの便益をあげるという形か。

【小林委員】

便益をあげる必要はない。私も代理店をやっているが、無料体験会で人数を集めてくれたら、それが営業活動につながる。放課後学習等、すべてが営業活動に繋がるので、そういった場を行政が作ってくれるという意味で、そんなありがたい話はないかと思う。

【佐藤会長】

こういう場に参加したいのであれば、市の方向性を理解し、協力してくださいという形で促せばいいと。

【小林委員】

ルール・マナーを大切にしているショップが増えれば、親はそこに買いに行くのではないかな。リスクがあるかもしれないショップより、公的に認めもらえるショップに普通であれば行きたい。そういったお店を増やしていくことが、行政や商店街の力が合わさればできるのではないかな。

【佐藤会長】

そのあたりをアバスポで取り入れられたらよい。スクールキャラバンでは少し難しいか。学校文化の中ではアレルギーがある可能性がある。

【鎌田委員】

難しいところであるかとは思いますが、子どもたちや親御さんにメッセージを伝えていける人がいるかということが大事。田中委員はすごく上手だと思う。メッセージ性があって伝わっていく。親とコミュニケーションも取れているところが非常に上手だと思う。一方で、今の話の先が、いかに健全な競技者を育てるかのような話になっていると思う。どっちに比重を置くかによって考え方が変わってくる。

【小林委員】

競技者に限定する必要はないと思う。静岡でスクールキャラバンをやっても、みんなが競技者になりたいわけではなく、レクリエーションとして楽しみたい人もたくさんいた。スケートボード等のシーン自体は広いものがあるが、その中で行政が広めたいアーバンスポーツがあるという話。行政がある

方向にベクトルを向けたとしても、反発する人は当然出てくる。それを全部取り締まるという話ではなく、行政が何を王道とすべきか明確にするのであれば、今みたいなやり方があるのではないかと思う。さいたま市が何かをやったからといって、必ず問題は残るが、理解できる人を増やすことが大事。

【鎌田委員】

全国のいろいろなところでお話をする中で、さいたま市の例を聞かれることが多い。注目されているからこそ、我々もしっかり、なおかつ先進的に取り組んでいかなければいけないと感じる。常に最先端を走る、みんなが真似したくなるさいたま市にしたいと思う。

【久世委員】

青少年市民会議の会長として、機関誌でこんな文章を掲載する予定。「ボランティアって何」ということで、パリ五輪のことが書いてあり、「特に昨今さいたま市でも取り組み始めているアーバンスポーツ、若い世代の活躍が話題でした」という出だし。その中で、「小中高生の参加により地域を発見させた行事もありましたでしょうか。未見の我を発見せよ、勉強だけでなく新しいことが何か芽生えるかもしれない。そしてそれをちゃんものにして、ボランティアで何かを指導して参りましょう。」と。スケボーは駄目だと取り締まるよりも、マナーを守る・みんなに嫌われることはしないといったことをしたいと思う。それで、ボランティアって何という投げかけをした。

【佐藤会長】

アバスポのときに施設とタイアップするのであれば、次の導線先としてこの施設に繋がっていけると思うが、そういった点で何かアイデアはあるか。

【小林委員】

ルール・マナーもしっかりやっていきたいと思っているショップの近くで、スクールキャラバン等をやることは1つあると思う。その際に、手伝いに来ていただく等、地元と行政で一緒に回していけるよう呼びかけをして、それがイベントや学校内の活動に結びついていけば、施設としてメリットになると思う。

【松田委員】

昨年度、大宮そごうの屋上で体験会をやったときに、インラインスケートは私が担当し、スケートボード・BMXも地元の方やパークの方で実施した。声をかけていけば、連携とってやっていけると思う。

【佐藤会長】

我々がブレインストーミングをした結果として事務局にお伝えしたいことで、1つは「導線」について。スクールキャラバンからアバスポ、アバスポふらっと野田小プール、それから各施設へとといった形で、子どもたちだけではなく、親子でどう導いていくか。軸足としては、まずはルール・マナーの部分について、地域を作る等の部分を前面に押し出していく。それにあたり、

地域性や適時性ということで、ルール・マナーも一律的なものではなく、初心者の方が来るときには、人として本当に守って欲しいことを伝えていく等、見せ方を工夫しながらやっていけばいいと思う。

次に、公と民の連携という部分で、街中で勝手にやることを防ぐという意味で、施設を持っているところと協力をしていく。協力していただけたところにお墨付きを与えるような形ができれば、民間の施設もいい顧客が増えていくというウィンウィンの関係を作っていけるのではないかとといったあたりをアイデアとして伝えさせていただければと思う。

もう少し伝えておきたいことがあれば、加えていただければと思う。

【小林委員】

マナーの啓蒙活動をやっていて、取組む子どもたちが低年齢化していると思っている。習い事のひとつとしてアーバンスポーツをやる子どもが多い。チームスポーツや誰かと競うスポーツは駄目だが、アーバンスポーツをやってみたら唯一はまってくれたという子どもが多くいる。そういう受け皿が形成できているのかなという中で親と話をすると、大事な幼少期に、ある程度の時間を預ける以上、活動を通じて立派な大人に育って欲しいという想いが共通してある。技術的なものとは別に、立派な大人になるように努めていることを明確に出すと、親から信頼していただける。アーバンスポーツはきっかけであって、私たちは人間形成をしているということを表に出せるような中身にしていくと親からの信頼が深まると思う。

【佐藤会長】

最後に補足的なことだが、アバスポの広報のひとつとして、これまでスクールキャラバンで行った学校に、次ここでアバスポがあることを伝えることはいいと思う。あとは、スクールキャラバンに保護者が見学に来ることについて、問題はあるか。

【鎌田委員】

全く問題ない。むしろ、保護者にも見ていただいた方がいい。

【佐藤会長】

保護者がいっぱい来るとなると、学校側の運営も難しくなってくるので、希望のある保護者だったら見に来てくれてもといったようなことを投げかけたら、先ほどの導線の補強にもなると思っている。

以上で終わらせていただき、進行を事務局にお戻しする。

⑤ 閉会

(9) 問合せ先 スポーツ文化局スポーツ部スポーツ政策室
TEL 048-829-1737
FAX 048-829-1996